

## 目次

1. 概要と日程
2. 競馬場での調査
3. 博物館での調査
4. ニューマーケットでの調査
5. 街中での調査
6. まとめ



## 1. 概要と日程

イギリス・フランスにおける競馬場や競馬に関わる博物館、その他の側面から両国の競馬文化がどの程度根深いものであるものかを調査した。今回はその結果を報告する。

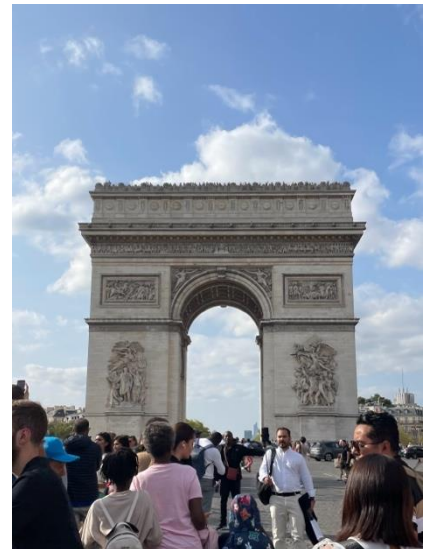
滞在した日程はフランスに9/29~10/3、イギリスに10/3~10/7である。これは芝の世界一のレースとも謳われる10/1（日）に行われた凱旋門賞とイギリスのニューマーケットのツアーやアスコット競馬場の開催日程を加味し、計画した。訪れた場所の一覧は以下の通りである。

### フランス

- ロンシャン競馬場（凱旋門賞が行われた競馬場）
- 馬の生きた博物館 別名：大厩舎（シャンティイ城含む）
- その他パリ市内

### イギリス

- アスコット競馬場
- 国立競馬博物館
- 衛兵博物館
- Tate Britain
- 大英博物館
- ニューマーケット（競馬の街）
- その他ロンドン市内



## 2. 競馬場での調査

私は日本の東京競馬場内にあるJRA競馬博物館でアルバイトをしているため、東京競馬場についてはよく知っている。そのような日本の競馬場についての知識を持っている私を感じた、競馬場での調査を通じて日本の競馬と英仏の競馬で違うと思った点、特徴的だと感じた点を一つずつ挙げていく。

まず一つ目は競馬場がある位置についてである。日本の競馬場は比較的都心のアクセスが良い場所にある。JRA が運営する中央競馬の競馬場は日本国内に 10 箇所存在するが、東京競馬場や札幌競馬場、阪神競馬場などを見てわかるように都市部から電車で 1 時間以内にある場合が多い。これは日本の競馬場が人為的に造られた競馬場であって、野原を駆け回るなどの自然発生的な競馬が発祥ではないことが原因と推測できる。一方で英仏の競馬場は人為的な競馬場もあるもののほとんどがレースやコースが整備される以前から競馬が行われていた場所にあり、広い土地に一応ラチヤスタンドをつけたような競馬場が主流であった。つまり英仏において競馬は競馬場が整備される前より自然発生的な競馬が行われていたことがわかる。

次にレースの開始時間についても違いが見られた。日本の競馬はナイターを行っている地方の競馬場もあるが、基本的に中央競馬ではかなり朝早くからレースが行われている。大体の東京競馬場の開場は 9 時、第 1 レースの出走時間は 9 時 55 分～10 時 5 分である。しかし、G1 と呼ばれる大きなレースの日はそれよりも開場やレース開始時間も早くなる。日本一の芝での競馬とも言われ、凱旋門賞と同じように海外馬の招待も行われたジャパンカップ (2023 年 11 月 26 日) は 8 時開場、第 1 レースの出走時間が 9 時 30 分となっていた。開場も早いですがレースの開始までの時間も 1 時間～1 時間半と短いのが特徴である。それに対し、英仏の開場時間はそこまで変わらないもののレース開始時間は午後からとかなり遅めであった。凱旋門賞が行われた日のロンシャン競馬場の開場は 10 時、第 1 レースの出走時間は 14 時 15 分であった。開場からレース開始まで 4 時間もあるのである。これは競馬場が開いてからレースが開始するまでお酒や食事を仲間と楽しんだり、談笑したりするいわば社交機能のための時間なのではないかと考える。



私は 10 時丁度にロンシャン競馬場につくようにしたが、レース開始 4 時間前にもかかわらず、多くの人がお酒や食事を楽しんでいた。競馬場内にはいくつものビールスタンドやキッチンカーから高級なレストランなど様々な食事できるスペースが設けられていた。特にビールのスタンドは多く、またシャンパンを瓶ごと透明なビニール製のバックの中に氷とともに入れ、持ち歩いている様子をよく見かけた。また、ビールを楽しむためのコップはかなり立派なプラスチック製のコップであったが、凱旋門賞専用やビールフェスティ

バル専用のデザイン担っていた。さらに、アスコット競馬場では丁度 10 月であったためか、オクトーバーフェストのようなビールフェスティバルが開催されていた。日本の競馬場でも飲酒は楽しめるが、ここまで気合を入れたものはなかなか見ることができない。そのため日本よりも競馬とお酒のつながりが深いことがわかった。このような飲酒との関係の深さは日本で読んでいた資料にも登場していたので直接見ることができ、とても感激した。







次に特筆すべき点は観戦者の服装についてである。日本はジーパン、短パン、ジョッキーのコスプレ、ウマ娘のTシャツ等ラフでなんでもありでさまざまな人がいる。もちろんダービーやジャパンカップになると正装している人も稀に見かけるがほとんどが普段通りの服装で競馬場を訪れているのに対し、英仏は多くの人がドレスやスーツであった。入場できないわけではないため、まれに短パンやジーパンを見かけたが、ほとんどの人がフォーマルな格好をしていた。特にアスコット競馬場はドレスコードがあり、シーズンや開催レースによって異なる

ドレスコードが適応されるため、予約メールやHPにドレスコードの案内が載っている。特にロイヤルアスコットと呼ばれるシーズンはかなり厳しいドレスコードが設けられている。(ドレスの場合、丈やショルダーストラップの幅、帽子を被らなければならないなど)ただ、民族衣装の着用は認められているため、例えば着物で行く場合帽子は必要ないなどのルールも設けられていた。

さらに特筆すべきはアスコット競馬場のキング・エドワードVIIエンクロージャー(有料の席、£65)ではかなり良い身なりの人が集まっていたことである。日本の競馬場でも有料の席はあるが、それを買うのは年配の競馬ファンが多い。しかし、アスコット競馬場の有料席にはお年寄りに加え、良い身なりの子どもや若者も多かった。反対に日本においては(特にJRAや東京競馬場では)ファミリー層を取り込む取り組みを行なったため、遊具やキッズルームが設置されているが、フランス・イギリスともにそのような場所はなかった。ロンシャン競馬場は比較的ラフな競馬場のためか、子どもの数もそれなりに見られたがアスコット競馬場では、子どもであっても正装であり、身なりがきちんとした子どもしかいなかった。また、馬主や関係者の家族の子どもがパドック内や表彰台上がっていたことも特徴であった。このように子どもとの関係にも違いが見られた。

日本と大きな違いを感じたのが馬主とレースの関係である。日本ではそこまで馬主に注目が行くことはなく、馬主が元々有名人(例:北島三郎、ジャンポケ斎藤など)の場合に注目が集まる程度である。

しかし、英仏においては馬主がレース関係者のなかでは最重要視されているようであった。表彰台では真ん中の位置であったり、かなり多くの馬主関係者(家族)が壇上に上がったりとかなり注目されていたが、とりわけそれが目立ったのはレース直後の中継映像である。日本であればレース直後は馬や騎手にフォーカスが当てられるが、凱旋門賞直後には着順確認のすぐ後に馬主が

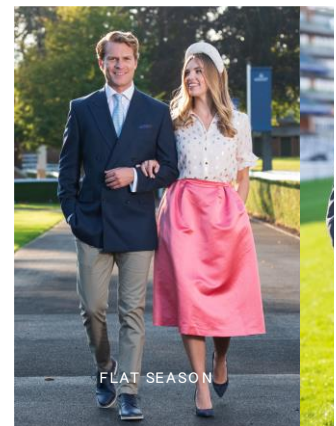


## WHAT TO WEAR AT ASCOT

ASCOT RACECOURSE DRESS CODES

The Ascot Dress Codes vary by season.

Explore our guidance below to find out what to wear to the racecourse.



喜んでいる姿が画面に映った。このようなことは日本ではないため、大変驚いた。また、パドックでの馬主同士の交流も見られ、おそらく馬主と見られる人が手綱を握る様子も見受けられた。このようなことは日本ではレースの公平性のために行われませんが、英仏ではレースの公平性よりも交流の方を大切にしているのだろうと推測している。

また、騎手とレースの関係についても違いがみられた。英仏の競馬において、馬主の次に注目されるのが騎手であった。特にフランスの出馬表には馬の写真は載らないのにも関わらず騎手の顔写真が載っていたことが特徴であった。表彰式でも息子など騎手の家族が揃って表彰台に上がっていた。

ここで日本と英仏の注目度の違いについて感じたことをまとめる。日本での注目は馬（ほぼアイドル化されている）>>騎手>>>厩舎>馬主となっており、馬が絶対的に注目を集める。しかし英仏での私が感じた注目は馬主>>騎手>>馬>>厩舎の順番になっており、馬は名誉を得る道具のようにも感じた。フランスでは馬券に馬の名前が載ることがないのはその一例である。もちろん馬にも愛情を持って接している様子も馬に名誉が与えられる様子も確認できたが、そのように感じてしまう場面もあった。

スポンサーについても違いを感じた。日本の競馬にはスポンサーの名前が表立って広告されない。レースの名前になることがあるくらいで、ラチ（コースのガードレールみたいなもの）に名前が入ることはない。しかし、英仏ではスポンサーの広告があらゆるところで見られた。例えばパドックの周りにスポンサーの名前があったり、内ラチにスポンサーの名前が大きく記載されていたりした。特に特徴的であったのは、表彰台にスポンサーである航空会社の CA が並ぶ場面があったことである。凱旋門賞の 1 番大きなスポンサーはカタール航空という航空会社である。たまたま私の往路の航空会社がカタール航空ということもあり、CA の服装を覚えていたために気づくことができた。このようなことは日本では見かけないため、驚いた。

また、パドックの機能も大きく異なった。日本でパドックというと買い目の馬を見つけるためのものであり、パドックを見てから馬券を買うという人がたくさんいる。また、1 番馬に近くで会える場所ということもあり立派な一眼レフカメラを構える人が大勢いる。そのためパドックはレース開始の 30 分前から馬が登場するようになっている。しかし、英仏ではパドックはレース直前のみであり、時間も短く、見てから馬券を買うまでの時間がない。つまり、馬券を購入するためのパドックではないことがわかる。またパドックの外側にはあまり人がおらず、パドックの中では常に多くの人で賑わい、社交の機能を持っていることがわかった。正装した子どもがパドックの中にいたことも大きな特徴であった。

さらに英仏では音楽隊が生演奏をしており、パレードも行われていた。特にフランスでは、大きなレースが行われる日であるためか、入場門のところで旗を振って出迎えられ、馬に乗った音楽隊によるパレードを何回も見ることができた。日本でも G1 のレースの際には自衛隊の音楽隊が演奏したりするが、馬に乗りながら演奏するのはフランスならではののではないかと感じた。表彰式においても音楽隊がいたり、馬車に乗って関係者が登場したりとかなり演出が豪華であった。また、レース前に Queen の曲で一致団結しており、音楽と競馬も切り離せないものであるようだった。しかし、日本のようにレース開始直前のファンファーレはなかったので少し残念に思った。



最後に賭けに関する部分での違いを紹介する。日本と英仏間での違いは場内の ATM の数からわかる。JRA ではギャンブル依存症対策のため、2022 年 2 月 20 日（日曜）をもって競馬場内の ATM サービスを廃止した。しかし、英仏共に競馬場内にかなりの数の ATM が設置されていた。この違いはおそらくインターネット上での馬券販売が日本はあることに対して英仏ではないことが理由ではないかと考察する。また、英仏間でも賭けに関しては大きな違いがあった。フランスでは終了したレースのオッズがどこにも表示されていなかった。賭けが重要であるのならば日本のようにレース終了後にオッズ確定のアナウンスや表示がされそうなものだが、フランスでは一切なかった。当たった場合の配当金は馬券を払い戻すまでいくらになったのかわからないのである。払い戻した際のワクワク感は他の競馬場に比べて強かったものの、フランスにおいてはあまり払戻の金額は重要でないようである。これは後述する場外馬券場 iPari Mutuel Urbain（パリ・ミュテュエル・ユルバン）が影響していそうでもある。一方イギリスでは賭けが中心の競馬であった。イギリスでは賭けを行う団体が一つだけでないのである。ベッティングポストがスタンド前にずらっと 40 個ほど並んでいた。その電光掲示板をよく見ると一つ一つオッズが違っているのである。自分が予想する馬のオッズが 1 番高いところを探しながら賭けている人も多くいた。もちろん公式もあるのでそちらで賭けても良いが、なるべく少しでも高いオッズにしたいのであればベッティングポストでかけるようである。競馬場における賭けの重要性はイギリス>日本>フランスのように感じた。



ちなみに競馬界では一番の注目を集めるレースであるといっても過言ではない凱旋門賞はあまり街中では注目度はなかったようである。2 度だけ街中でポスターを見かけたものの他の場面では凱旋門賞に関する情報を見かけることはなかった。ドミトリーで同室であったアメリカ人 2 人と中国人に凱旋門賞を知っているか尋ねたところだれも注目していないようであった。それよりも話題は同時期にパリで開催されていたラグビー W 杯にあった。これがなければ凱旋門賞はもっと注目されていたのかそれとも普段通りなのか機会があれば凱旋門賞にまた訪れて確かめてみたいと考えている。

## ● ロンシャン競馬場

ロンシャン競馬場で感じたこと・特徴をここに記す。

まず驚いたのは勝利していない馬に対しても、どんなレースであってもレース後に騎手や馬を称えることである。レースを走り終わった馬はスタンドの前を歩いて帰っていく動線になっていたが、レース後の馬に対しては大きな拍手や声援が送られていた。このようなことは日本でもあるものの G1 レースや勝利した馬のみに送られることが多く、フランス人の馬への愛を感じることができた。しかし前述したように馬が主役ではないと感じる場面も多くあった。日本のレース終了後は走り終わった馬をずっと写すことが主流だが、フランスではレース後真っ先に勝った馬の馬主が画面に映るようになっていた。このような部分ではやはり馬は名誉のための所有物であると感じてしまった。

次におもしろいと感じたのは馬券には QR コードがついており、的中馬券の場合その QR コードを専用の機械で読み取ることで次の馬券を買うことができる仕組みになっていた。日本であれば的中した



馬券は一度払い戻す必要があるが、その手間がないこの仕組みはとても面白いと感じた。

最後にパレードの多さにはとても驚いた。少しの隙間時間があれば音楽隊が登場したり大音量で音楽が流れたりと終始楽しい雰囲気であった。ロンシャン競馬場はパリにあり都会的な雰囲気をもつのかと予想していたが、ブローニュの森という森林公園の中にありのどかな雰囲気であった。イギリスの競馬場ほどかしまっていることではなく、和やかでゆったりと、でも楽しい雰囲気を持つフランスの競馬場は居心地がとてもよいと感じた。

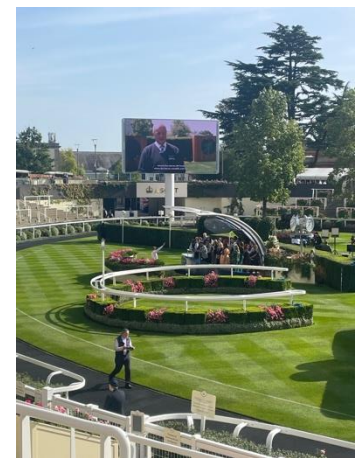


### ● アスコット競馬場



アスコット競馬場はイギリス王室が所有する競馬場であり、今まで見たどの競馬場よりも豪華で綺麗であった。調べてみたところ2億2000万ポンド（当時のレートで約420億円）もの巨費を投じて、18か月にも及ぶ改修工事を行い、2006年6月に再オープンしたものである<sup>1</sup>とされていたが18年前に改修したとは思えないほどきれいであった。いたるところにユニオンジャックが掲げられており、ショップもネクタイやハットなど紳士的なものが多く取り扱われていた。また、競馬場内にはブランドのショップもあり、ショッピングを楽しんでいる人も見受けられた。

そのような紳士的な一面を持ち、観客もしっかりとスーツを着用し、厳かな雰囲気なのかと感じていたが、レースが始まると日本の競馬場とそう変わらない怒鳴り声のような声援が多く聞こえてきた。ゴール後には大きな雄叫びを上げている人を見かけることも少なくなかった。観客は大きく二つに分類でき、いかにもイギリス紳士・淑女風の服装でお酒を片手に優雅に競馬を楽しむ集団か若者が大人数で賭けを楽しんでいるかに分かれていた。また、セキュリティも観客と共に競馬を楽しむ様子も見た。観客が一体となって競馬を楽しむ姿は大迫力であったが、私個人としてはフランスの競馬場の方が好みである。



### 3. 博物館での調査

#### ● 馬の生きた博物館 別名：大厩舎

<sup>1</sup> <https://www.jra.go.jp/keiba/overseas/country/gbr/ascot.html> (2024/02/29)



自分が死ぬと馬に生まれ変わると信じていたブルボン公ルイ・アンリのために、1719～1735年に大厩舎がシャンティイ城の厩舎として建設され、1982年にこの大厩舎に「馬の生きた博物館」が設置された。展示内容としては、シャンティイ城の大厩舎がなぜ建設されたのかの建物の歴史から始まり、人と馬の関係史を現代に至るまで解説した博物館であった。古代は世界の歴史を中心としていたが、近現代はフランスの歴史を中心としていた。また、道具の歴史（鞍や馬銜など）



のものであると感じた。鞍については多くの鞍が壁一面に保管されている空間があるなどファッションの中心地であるフランスらしさを感じることができた。特に

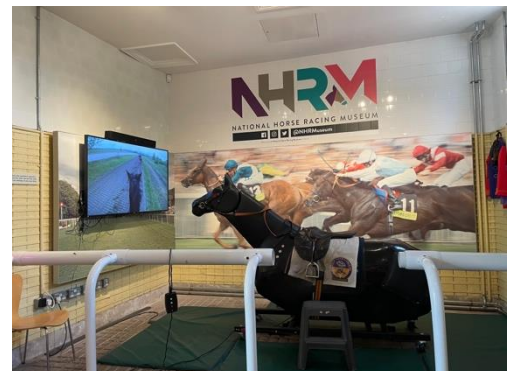
売りとされているのは、入館してすぐの生きた馬の展示と馬術ショーであった。競馬に関する展示はさほど多くなかったものの、狩猟や貴族との関わりに関する展示がいくつかあった。特にシャンティイ城の城主であったオーマル公アンリ・ドルレアンは美術品の収集を行っており、シャンティイ城の中にコンデ美術館という美術



館が作られているほどである。その美術品のいくつかをこの博物館に展示している影響もあり、世界中の美術品やルイ 14 世の肖像画をはじめとする貴族の肖像画も集まっていた。シャンティイ城内は狩猟が中心であったものの馬に関する絵画や装飾を見ることができた。競馬と貴族の関わりというよりは、馬と貴族の関わりが中心であったため競馬というテーマに活かすことは難しいかもしれないが、いくつかの展示は今後の貴族と競馬の関係を紐解くことに活かすことができるのではないかと考えている。

## ● 国立競馬博物館

近代競馬発祥の地（ジョッキークラブが創立された地）とされているニューマーケットの街に造られた博物館である。2016年にエリザベス女王の手により開館と比較的新しい。展示内容も新しいが、建物自体は1896年に厩舎として建設されている。今も現役の厩舎として機能しており、訓練の施設も存在する。展示内容としてはイギリスの競馬史や現代の競馬を中心に（日本のJRA博物館よりも）幅広く、深く解説されていた。得た情報の一例をあげると、1752年に1番最初の障害競走の記録がアイルランドで残されていたことや、ジョージ2世による賭博禁止法とその議会議法の一次資料、1593年にジャーバス・マーカムが出版した『馬術に関する談話』に競馬が形式化されてきたという話など卒論に活かすことができそうな資料を見つめることができた。また、カフェが併設され、子ども向けの展示も充実しており、レジャー施設として楽しむことができるようになっていた。さらに馬に跨ってジョッキー目線でレースを楽しむことができる体験機器もあり、奥の



方で紅茶を楽しんでいたご老人が案内してくれたため私も体験することができた。平日ではあったもののそれなりに人も訪れていて、非常に面白い施設であった。

さらに、狩猟や競馬の美術品の収集をしていた Fred Arthur Rank Packard 氏の寄贈による 4 階建の美術館も敷地内にあった。かなり多くの絵画を集めており、いくつあるのかを尋ねたところ数えたことがないがおそらく 100 以上ではないかという答えが返ってきた。企画展を行うこともあり、作品数が変動することもあるそうだ。私がこの美術館を訪れた時は誰も館内にいなかったため、貸切で楽しむことができた。馬単体の絵や狩猟犬の絵、狩猟の様子など競馬と狩猟尽しであった。時間があれば一日中居たい場所であった。競馬の歴史というよりは競馬文化を広めるための施設であったため、現代の競馬を取り巻く環境が中心であった。しかし、一次資料がいくつも展示されていたのでそれを元に今後の研究を進めていこうと考えている。

### ● ロンドン衛兵博物館

ホースガース (騎兵隊) の交代が行われているのを見にウェリントン兵舎を訪れたところ、偶然発見した。イギリスの衛兵の歴史を取めた博物館であるため、展示内容はホースガースに限らないものの隣が厩舎のため、かなり詳しくホースガースについて取り上げられていた。衛兵の始まりから第 1 次世界大戦のイギリスの軍など幅広く展示されていた。厩舎と接続されているため、博物館の中から馬の生活の様子を見ることができる。とくに騎兵隊は馬と人が同時に訓練を受けるため、馬と人が共に生きるとはどのようなことかについて触れられていた。日本にはない騎兵隊という仕組みやその訓練方法について学ぶことができた。(おおよそ白バイ隊員に近いように感じた。)

### ● TATE Britain

以前の研究で触れた「the Derby Day」を直接見ることができた。何か新しい発見が会ったわけではないが、私が競馬と社交の関係に着目したきっかけとなる絵画出会ったので、とても感激した。TATE Britain はナショナルギャラリーからイギリスの作品を専門として分かれた美術館であるため、イギリスの絵画作品のモデルとなりやすいものを知るにはここを訪れるべきだと考えていた。私の予想通りありとあらゆるところに馬が描かれており、それは農村の景色であったり、戦場であったり、馬自体をモデルにしたものもあり、馬と人が一緒に生きてきたことを感じることもできた。



### ● 大英博物館

大英博物館で何か馬に関する展示がないかと探すつもりで訪れたのだが、展示品があまりに多すぎるためとても困った。馬に関する展示もとても多く、探すまでもなかったのだが、その全てを確認しようとする試みが無謀であった。それでもいくつかの馬に関連しているものを確認してきたのでそれを羅列する。

- アッシリアの壁画



- パルテノン神殿の馬の頭部
- 馬だらけの間（何かの神殿の壁）
- 大きな馬の頭

ほかにもどこかの壺に馬の絵が書いてあったり、二階のどこかにある皿に馬の絵が描かれていたりした。何度も館内で迷子になったためどの時代のどの場所だったのかわからなくなってしまったが、大英博物館のアーカイブがあるはずなので今後必要になれば探したい。

#### 4. ニューマーケットでの調査

とても田舎の街であったが、駅に着いた瞬間から待合室やゴミ箱、植木鉢に至るまで馬だらけであった。さらにホームの外にはニューマーケットの歴史が展示されていた。(仮設トイレが目の前に設置されており、一部読めない部分があったため、街の歴史が大切にされていないのかと少し残念な気持ちにはなった。)どのような町かを一言で説明すると「常に馬のいななきが聞こえるか馬の匂いがする町」である。街の中心部にはジョッキークラブの建物があり、馬の銅像がありとあらゆる場所に建っていた。街の四方をギャロップに囲まれており、あらゆるところに厩舎がある。さらに厩舎とギャロップの間を馬に乗って移動するため、馬が車よりも優先で、馬専用の信号もあった。ガイドツアーではいくつかのギャロップや厩舎を巡ることができた。同じツアーに参加している人の話を聞くと娘と息子がどちらも馬術を嗜んでいたり、馬主だったりした。普通に日本で生活しているだけではできない貴重な経験ができた。



#### 5. 街中での調査

- フランスの場外馬券場 iPari Mutuel Urbain (パリ・ミュテュエル・ユルバン)

フランスでは場外馬券場としてカフェやバーなどで馬券を買うことができる。この PMU は HP<sup>2</sup>で探すことができる。歩いていると自然と見つかるほど多くの場所で馬券を楽しむことができる。(フランスに 7000 以上) つまり、フランスでは、賭けをする人は PMU に行き、競馬を楽しむ人は競馬場へ行くという棲み分けができていないかと推測する。



### ● ホースガース (騎兵隊)

常に王室騎兵乗馬連隊又は王立騎馬砲兵・国王中隊によって警備されている建物。騎兵隊を間近に見ることができる。人気の観光地となっているため朝早かったもののかかなり多くの人が訪れていた。騎兵隊は男性のみであったが、騎兵隊の交代式の先導をしている警察も馬に乗っており、警察官は女性であった。騎兵隊だけでなく警察の中でも乗馬ができるというのは日本と大きな違いであると感じた。



また、凱旋門賞翌日の競馬の新聞を入手した。日本での競馬の新聞 (同じ日) も入手したので比較をしたかったのだが、ちょうどその日、日本で大人気の白毛の G1 馬、ソダシの引退が決まり、一面が取られてしまったため比較しにくい状況になってしまった。(凱旋門賞でも日本の馬が 4 着に入ったため、本来であれば一面を飾る相当の出来事ではあったのだが…) そのため、凱旋門賞の新聞を比較するのはまたの機会があれば行いたい。

## 6. まとめ

パリもロンドンも至る所に銅像があるが、馬に乗っていることがかなりある。さらには馬だけの銅像もあり、生活の中での馬を身近に感じることができた。10 日間という長くて短い期間の中で最大限に馬と共に暮らす人々の生活について触れることができた。日本での馬の扱いと英仏の馬の扱いはかなり違い、日本での馬の扱いがどこか他人行儀のアイドル的存在であるならば、英仏における馬の扱いは隣人的なものでかなり距離が近く、所有物的であると感じた。現代の生活の中で馬を活かすことができているのはどちらかと問われると長い歴史を持つヨーロッパに軍牌が上がる。結局のところ馬をうまく利用できなくなってしまうと、日本の在来馬のように馬という存在自体が絶滅の危機に瀕してしまう。しかし、エ

<sup>2</sup> <https://www.pmu.fr/point-de-vente/trouver-point-de-vente-pmu/> (2024/02/29)

ースインパクトの早すぎる引退などを考えると英仏と日本のどちらの扱いが良いのかは一概に言うことはできないのではないかと考えている。今後この経験を活かしながら卒論の研究を行い、馬を愛するものとして馬の未来に一石を投じることができるような研究を行いたい。